論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※　　第　　号

氏　　名　ALLISON Timipere Felix

論　文　題　目

Functional Corruption in Nigeria: Political Stability, Inter-ethnic Elite Alliance and 'Bring Back Our Corruption' Movement
（ナイジェリアにおける腐敗の諸機能： 政治的安定、民族エリート間連合、「我々の腐敗を返せ」運動）

論文審査担当者

主　査	名古屋大学	准教授	日下　渉
委員	名古屋大学	教授	西川　由紀子
委員	名古屋大学	准教授	岡田　勇
委員	名古屋大学	教授	山形　英郎

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

1. 論文の概要と構成

本博士論文は、ナイジェリアを事例に、政治腐敗が果たす諸機能を明らかにしようとするものである。

序章では、本論文の議論が簡略に提示される。腐敗研究の主流派は、腐敗が政治的不安定を引き起こし、大衆を犠牲にするものと断定してきた。だが、ナイジェリアでは腐敗が一定の政治機能を果たしたことを示唆する事例があり、主流派の議論に対する反証となっている。まず、1999 年の民主化以来、甚大な汚職の横行にもかかわらず、一定の政治的安定が保たれてきた。次に、2015 年にブハリ大統領によって厳格な腐敗取り締まりが断行されると、一般大衆はこれに抗議して「我々の腐敗を返せ」運動を展開した。それゆえ、本研究では次の二つの問題に答えることを目的とする。（1）腐敗の蔓延にもかかわらず、なぜナイジェリアでは 1999 年以降、政治的安定が維持されてきたのか。（2）ナイジェリアの大衆は腐敗の犠牲者だと考えられるにもかかわらず、なぜ 2015 年から実施された腐敗取り締まり政策に反対したのか。

これらに対する本論文の答えは次の通りである。まず、1960 年から始まる軍政期には、各エスニック集団のエリートが国家権力と国家資源を独占しようと熾烈に競合したので、政治が不安定化した。しかし、1999 年の政治的民主化に伴って腐敗も民主化し、各エスニック集団のエリートが、レント・シーキングに基づく腐敗を分有する仕組みを構築した結果、政治的安定も保たれた。また、エリートがパトロネージのネットワークを通じて大衆に供与する腐敗の分配金は、公的な社会保障制度が脆弱ななか、非公式なセーフティ・ネットとして機能してきた。それゆえ、2015 年に強硬な腐敗取り締まり政策が実施されると、この非公式なセーフティ・ネットに深く埋め込まれ、それに生活を依存してきた人々が、「我々の腐敗を返せ」と訴える抗議活動を展開するに至った。

第 2 章では、理論研究に基づき、諸概念と分析枠組みを設定する。まず政治学における機能主義の流れを追いつつ、それがいかに腐敗研究に応用され、腐敗研究の主流派に対してオルタナティブな議論を提示したのかレビューする。次に、先進国の文脈で論じられてきた機能主義に基づく政治的安定の分析を、途上国に適用する作業を行う。そして、サハラ以南アフリカの事例に拠りつつ、腐敗と政治的安定の相関関係は、レント・シーキングをめぐるエリート間の取り引き次第で、正にもなりうると論じる。そのうえで、途上国において腐敗取り締まり政策がしばしば失敗してきた理由として、制度や政治的意思の脆弱さといった従来の説明の限界を指摘し、腐敗の機能を停止させてしまうことで反発を招くためだとの仮説を提示する。最後に、前述した本論文の議論（問いに対する答え）を理論的に提示する。

第 3 章では、1960 年から 1998 年に焦点を当てて、腐敗が政治的安定を支える機能と、非公式な福祉提供機能を果たさなかった理由を明らかにする。まず、量的データによる他国との比較を通じて、この期間ナイジェリアが政治的に不安定だったことを示す。それは、国軍の中枢を支配する北部エリートと、民選議員の多数派を占める南部エリートという、エスニック集団間の対立を背景に、クーデタと民政移管が繰り返されて、レントを共有する非公式な制度が築かれなかったからである。また軍政期間、民選政治家は国家資源にアクセスできなかったので、パトロネージ政治を通じた大衆への福祉提供機能も国軍有力者に近い者に限定された。

第 4 章では、民主化が生じた 1999 年から 2014 年に焦点を当てて、腐敗が政治的安定を支える機能

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

と、非公式な福祉提供機能を果たすようになったことを示す。まず、量的データによる他国との比較を通じて、この期間ナイジェリアが相対的な政治的安定を得たことを示す。それが可能になったのは、民選議員が、地域とエスニシティの分断を超えて国民民主党（Peoples' Democratic Party: PDP）を設立し、政権をローテーションで回しつつ腐敗を共有する非公式な制度を作ったためである。ただし、2014 年、この取り決めが破られたことをきっかけに全進歩議会（All Progressives Congress：APC）が政権を握り、ライバルを攻撃しつつ自らの腐敗を確保すべく、反腐敗政策を PDP に対して発動した。こうして政治的安定が揺らぐことになった。

第 5 章では、2015 年以降に焦点を取り上げて、強硬な反腐敗政策が民衆の反発を呼び、「我々の腐敗を返せ」運動を引き起こしたことを論じる。APC は反腐敗の態度をアピールすべく、厳格な反腐敗政策をとったことで知られる軍人出身の元大統領ブハリを大統領候補に担ぎ上げ、政権を奪取した。しかし、ブハリの厳格な反腐敗政策は、彼を担ぎ上げたエリートにも適用されるだけでなく、エリートのパトロネージを通じて腐敗の配分にあやかっていた大衆の反発を招いた。

第 6 章では、本研究の知見を簡潔にまとめたうえ、腐敗の諸機能を理解したうえで反腐敗政策を立案・実施することの重要性を提案する。

2. 評価

本論文の貢献は、1960 年代後半に提示された腐敗の機能主義アプローチを再評価してナイジェリアの事例に適応し、腐敗が政治的安定と大衆の福祉に寄与する条件を明らかにしたことである。これは、研究者の間でも支配的で、国際機関のプログラムの前提としても活用されてきた腐敗の非機能主義を訴える主流派のアプローチに対して正面から異議を唱えるものである。そして、主流派の議論によって覆い隠されてきたメカニズムを解明した点において、きわめて独創的であり、斬新な知見を提示している。口頭試問において非常に活発な質疑応答が展開されたことからも分かるように、既存の「常識」に挑む本研究は、今後も多くの論争を巻き起こすことが期待される。腐敗をめぐる既存の研究に一石を投じた点でも、本研究は高く評価できる。また本論文は、単に腐敗の機能主義アプローチを再利用し、現代ナイジェリアに応用しただけでなく、どのような条件において腐敗は機能的になりうるのかについて具体的な条件を特定し、理論的な考察を深めたという意義もある。これによって、今後、多国間比較研究を通じて、本論文の知見をさらに精緻化・発展させていく可能性も開かれた。

ただし、本論文には不十分な点も含まれる。第一に、多くの知識人へのインタビューを行って自説を支えているものの、腐敗の機能について説明する一次資料が乏しい。たとえば、エスニック集団の分断を超えたエリートの連携が可能になった理由について、政治家や元政治家自身からの説明があれば、より説得力が増したであろう。同様に、腐敗の非公式な福祉機能についても、貧困世帯がどれだけ政治家から配分される資源に依存しているのか、より具体的なデータがあれば良かった。第二に、こうした一次資料の乏しさを背景に、腐敗が実際に福祉機能を果たしているのか、それともそのように人々が認識しているだけなのか、「実態」と「言説」の混同が生じている。第三に、政治的安定が実現した要因を、エリートによるレント・シーキングの共有のみに帰すことができるのか疑念が残る。第四に、腐敗が政治的不安定に結びついた諸国が多いなかで、なぜナイジェリアでは腐敗が政治的安定に寄与したのか必ずしも明らかではない。ナイジェリアでは石油資源をめぐる独特のレント・シー

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

キングの構造が効いている可能性もあり、より政治経済学的な分析も望まれる。

しかし、これらは本論文を通じて切り開かれた新たな研究課題であり、著者が今後の研究によって追及すべものである。それゆえ、本論文の価値や独自性を損ねるものではない。本論文は，博士論文としての水準に足りるオリジナリティと学術的価値を十分に有していると判断する。

3. 判定

以上のような審査の結果、本論文は博士（国際開発学）の学位に値するものと判定する。